

# ツツジ・シャクナゲ類の病気の見分け方と防除

秋 本 正 信

## はじめに

近年、環境緑化への関心の高まりを受け、公園、街路、公共施設周辺などに緑化樹が積極的に植栽されるようになってきました。こうした植栽木の維持管理上、病害の診断、防除は欠かせませんが、北海道では、緑化樹病害についての知見が少なく、診断に手間取ることも少なくありませんでした。そこで、「緑化樹木の病害診断技術の向上」を課題として、平成8年度から3年間、道内各地の公園や苗畑などで緑化樹病害の発生実態について調査しました。その結果、多くの病害が発見され、診断の要点も明らかになってきました。

ここでは、道内のツツジ・シャクナゲ類に発生している病害について、診断の要点と防除法を紹介します。

なお、本文中の「罹病樹種」、「発生地域」は、病害の発生を著者が直接確認した樹種や地域を指し、他の樹種や他地域で発生していないことを示すものではありません。

## ツツジ類の病気

もち病 (病原菌: *Exobasidium Japonicum*)

症状: 葉の一部が、半球状～球状に膨大する (写真-1)。このふくらみは肉厚、中空で、はじめは淡黄緑色だが、病原菌の菌体が表面に現れるようになると粉っぽい白色になる。ふくらみはやがてピンク色～淡紅色になり、のちに、萎縮、黒変する。病名のとおり、葉に「もち」のような異物がついたように見え、人目をひく。

罹病樹種: エゾムラサキツツジ、ヤマツツジ、サツキ

発生地域: 上川、空知

防除法: 患部に形成される胞子が翌年の感染源になるので、ふくらみが粉白色になる前に罹病葉を摘み取って焼却するか、土中に埋める。

平もち病 (病原菌: *Exobasidium* sp.)

症状: 若葉の表面に、直径5mm前後の類円形、鮮黄色の斑点



写真-1 エゾムラサキツツジもち



写真-2 エゾムラサキツツジ平もち病

が1～数个形成される(写真-2)。のちに、この斑点はやや淡紅色を帯びる。葉裏の病斑部は、はじめ淡黄綠色で、やがて粉白色になる。これは葉裏に病原菌の菌体が現れたためである。

罹病樹種：エゾムラサキツツジ、シロバナトキワツツジ

発生地域：上川、空知

防除法：病斑の葉裏に形成された胞子が感染源になると考えられる。葉裏の病斑が粉白色になる前に罹病葉を摘み取り焼却するか、土中に埋める。

さび病(病原菌：*Chrysomyxa Iedivar.rhododendri*)

症状：葉表に、輪郭がぼやけた黄色い小斑点が形成される。葉裏の病斑部ははじめ淡黄色で、やがてぼつぼつと形成される小隆起から橙黄色の粉状物(病原体の胞子)が吹き出す(写真-3)。

罹病樹種：エゾムラサキツツジ、シロバナトキワツツジ

発生地域：石狩、空知、上川、網走

防除法：ヨーロッパトウヒなどのトウヒ

類が中間宿主になると考えられているが、近くにトウヒ類がなくてもふつうに発生する。春、前年罹病葉上に形成された胞子(夏胞子)が新葉の感染源になっているようである。感染を防ぐには、新葉展開時に、ジネブ剤、チアジアジン剤などの殺剤を散布する。または、葉裏に黄粉が形成される前に、前年の罹病葉を摘み取って焼却するか、土中に埋める。

うどんこ病(病原菌：*Phyllactinia sp.*)

症状：葉表に淡紫黒色のしみのような部分が生じる。葉裏の病斑部は白粉状となり、のちに白粉は目立たなくなり、葉裏のほぼ全面に黒色小粒点(菌体)が密生する(写真-4)。

罹病樹種：ヤマツツジ

発生地域：上川、渡島

防除法：罹病葉上に形成された菌体が翌年の感染源になると考えられるため、降雪期前に落葉を集めて焼却する。本病はふつう晩夏以降に発生するため、罹病木に対するダメージは少ない。

黒紋病(病原菌：*Rhytisma shiraianum*)

症状：葉表に小黑点(菌体)の集団がスポット状に数カ所生じるが、黒点が葉のほぼ全面を覆うこともある(写真-5)。個々の小黑点は光沢があり、やや隆起して生じる。黒点が形成された部分は、葉色がうすれて黄色みを帯びる。

罹病樹種：ヤマツツジ

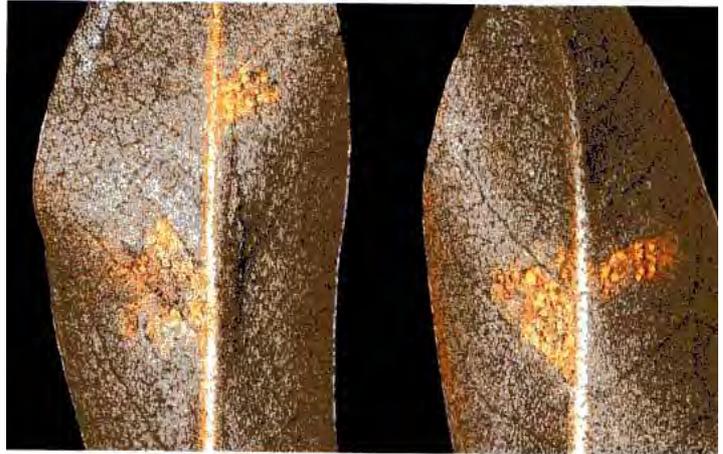


写真-3 シロバナトキワツツジさび病



写真-4 ヤマツツジうどんこ病

発生地域：渡島

防除法：被害は目立つが、ふつう秋以降に発生するため本病の影響は少ない。春、罹病落葉上に形成される胞子が、当年の感染源になると考えられるので、初冬または早春に落葉を集めて焼却するか、土中に埋める。

花腐菌核病（病原菌：Ovulinia azaleae）

症状：開花後、花弁に生じた淡褐色のしみが拡大し、花全体が褐変してしおれる。罹病花弁上には、不生形、板状の小さな黒い塊（菌核と呼ばれる菌体）が数個生じる（写真－6）。通常、健全花は花期終了後まもなく地上に落下するが、罹病木では、褐変萎凋した罹病花が葉や枝に長期間張り付いているため被害はよく目立つ。

罹病樹種：エゾムラサキツツジ、レンゲツツジ、ヤマツツジ  
発生地域：空知、十勝、渡島

防除法：本病によって株全体が衰弱することはないが、美観上、しばしば問題となる。地上に落下した菌核が翌春の感染源になるので、罹病花がまだ樹上にあるうちに摘み取って焼却する。

#### シャクナゲ類の病気

粉もち病（病原菌：Exobasidium shiraianum）

症状：6月頃、展開後間もない柔らかい葉が罹病する。罹病葉の葉表は部分的に、のち全面的に退色して淡い黄緑色を呈す。葉裏はさらに退色がすすみ、のち白粉状となる（写真－7）。白粉状のものは、

病原菌の菌糸や胞子である。病葉はしばしば不規則に変形し、やがて全葉が萎縮、黒変する。同じ芽から出た葉はすべて発病する。

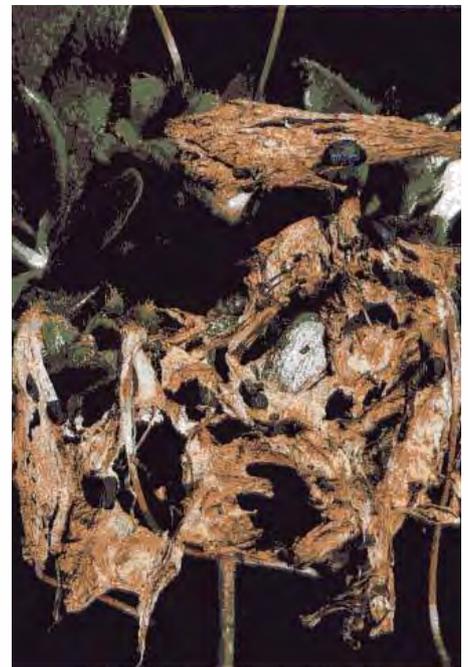
罹病樹種：ハクサンシャクナゲ

発生地域：十勝

防除法：罹病葉の葉裏が白粉状になる前に枝ごと切り取って焼却するか土中に埋める。葉色に著しい違いがあるので、開葉初期でも罹病葉を容易に判別できる。



写真－5 ヤマツツジ黒紋病



写真－6 ヤマツツジ花腐菌核病



写真－7 ハクサンシャクナゲ粉もち病

玉もち病（病原菌：*Exobasidium hemisphericum*）

症状：葉裏の葉脈部が丘状～半球状に膨大する。患部はやがて白粉状となり、のちに萎縮、黒変する（写真－8）。

罹病樹種：ハクサンシャクナゲ

発生地域：十勝

防除法：患部が白粉状になる前に罹病葉を摘み取って焼却するか、土中に埋める。



写真－8 ハクサンシャクナゲ玉もち病

さび病（病原菌：*Chrysomyxa succinea*）

症状：秋、当年葉の葉表に不鮮明な淡橙色小円斑が多数形成される。翌年夏には、明瞭な橙色斑となり、斑点部の葉裏には、虫の卵の集団のようにみえる半球状、オレンジ色の固まり（冬孢子堆とよばれる菌体）が形成される（写真－9）。のち、この固まりは脱落して褐色の小さなくぼみが残る。病斑部は褐変するが、罹病葉全体が枯死することはない。



写真－9 ハクサンシャクナゲさび病

罹病樹種：ハクサンシャクナゲ

発生地域：十勝、日高

防除法：アカエゾマツなどトウヒ類の「葉さび病」罹病葉から飛散する孢子（さび孢子）がシャクナゲ類に感染する。このため、トウヒ類の近くにシャクナゲ類を植えないようにする。トウヒ類からの感染を予防するには、孢子が飛散する夏期に、ジネブ剤、チアジアジン剤などの殺菌剤を当年葉に散布する。

芽枯病（病原菌：*Pycnostysanus azaleae*）

症状：花芽が褐変枯死するため春になっても芽吹かず、花付きが悪くなる。罹病枯死した芽には、やがて黒いひげ状の菌体が密生して生じる（写真－10）。菌体の頂端には丸い灰色の孢子の塊がつく。

本病は、東北地方では、レンゲツツジに激しい被害を与えることが知られているが、北海道ではツツジ類での発生は未確認である。



写真－10 ハクサンシャクナゲ芽枯病

罹病樹種：ハクサンシャクナゲ

発生地域：十勝、日高

防除法：罹病枯死した花芽に形成される菌体が感染源になる。春、ひげ状の菌体が形成される前に、枯死芽を摘み取って焼却するか、土中に埋める。

#### ドウダンツツジ類の病気

ドウダンツツジ類は、同じツツジ科でも、ツツジ類、シャクナゲ類、（ともにツツジ属）とは異なるグループ（ドウダンツツジ属）に属し、病原菌の種類も異なるため、項目を改めて紹介します。

もち病（病原菌：Exobasidium sp.）

症状：若葉の頃、葉表の一部またはほぼ全面がはじめ淡紅色、のちに光沢をもった鮮やかな紅色になる。患部は肉厚で、罹病葉は不規則に変形する。葉裏の患部は、はじめ目立った変化はないが、やがて著しい白粉状を呈する（写真-11）。罹病葉は早期に落葉するため、夏期以降は被害に気づかない。



写真-11 サラサドウダンもち病



写真-12 サラサドウダンビロード病

国内外とも、本病の発生報告はないようである。

罹病樹種：サラサドウダン

発生地域：空知

防除法：白粉が形成される前に、罹病葉を摘み取って焼却するか、土中に埋める。

ビロード病（病原：フシダニの一種）

症状：葉裏の一部に紅色のビロードを張り付けたような外観を示す。罹病葉は上面にカールするため、葉裏の紅色がよくめだつ（写真-12）。

罹病樹種：サラサドウダン

発生地域：後志

防除法：本病はフシダニの仲間による虫こぶの一種である。被害初期に、クロルベンジレート剤やケルセン剤などの殺ダニ剤を散布する。

うどんこ病（病原菌：Phyllactinia sp.）

症状：葉表がくすんだ赤紫色になり、葉裏はかすかに粉白色を帯び、のちに微少な黒粒点を散生する（写真-13）。

罹病樹種：サラサドウダン

発生地域：渡島

防除法：罹病葉上に形成される菌体が翌年の感染源になると考えられるので、落葉を集めて焼却する

か、土中に埋める。

さび病（病原菌：*Aecidium enkianthi*）

症状：葉の表裏に直径 5 mm 前後の橙黄色、類円形の病斑を生じる。葉表の病斑中央部には、淡褐色の微小隆起が群生する。葉裏には、縁が白い、カップ状の小さな菌体が多数生じ、これから白粉状の胞子が吹き出す（写真-14）。

罹病樹種：サラサドウダン

発生地域：渡島

防除法：中間宿主は不明である。葉裏に菌体が形成される前に、罹病葉を摘み取って焼却するか、土中に埋める。

黒紋病（病原菌：*Placuntium andromedae*）

症状：葉表に直径 15 mm 前後の黄褐色～暗褐色、周縁が暗緑色の類円形病斑が形成される。葉裏の病斑は全体に淡色である。病斑の葉表には、おもに病斑周縁部と葉脈上に、漆黒色の少し隆起した小黒点が多数散生する（写真-15）。

罹病樹種：サラサドウダン

発生地域：渡島

防除法：罹病落葉上に形成される菌体が翌年の感染源になると考えられるので、落葉を集めて焼却するか、土中に埋める。

### おわりに

ここでは、ツツジ・シャクナゲ類の葉や芽の病気 15 種類について紹介しました。このほかにも、日本で発生記録がないと思われる数種の葉枯性病害が認められました。これらについては、現在、病原菌の調査を進めています。

一般に、ここで取り上げたような葉の病気では、春に、前年の罹病落葉上に形成される胞子が当年の第一次感染源になります。ですから、初冬に落葉を集めて焼却することは、翌年の感染源を絶つという点で有効な防除法と考えられます。晩秋の「落ち葉焼き」にはそれなりに意味があるわけです。

（森林情報室）



写真-13 サラサドウダンうどんこ病



写真-14 サラサドウダンさび病

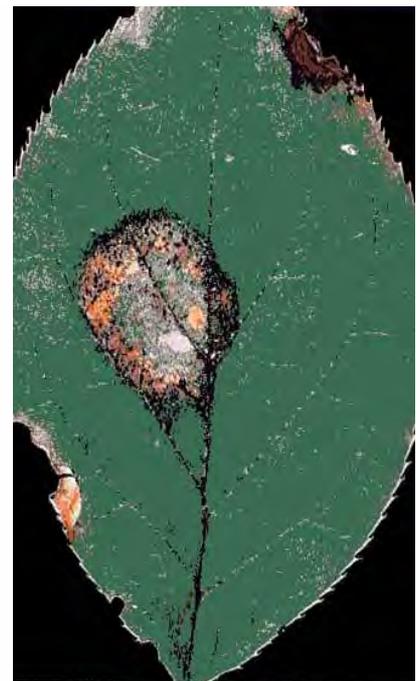


写真-15 サラサドウダン黒紋病